

## 建築工学科

---

教 授	岩 田 伸一郎	・ ・ ・ ・ ・	3 9
〃	亀 井 靖 子	・ ・ ・ ・ ・	3 9
〃	北 野 幸 樹	・ ・ ・ ・ ・	4 0
〃	篠 崎 健 一	・ ・ ・ ・ ・	4 0
〃	下 村 修 一	・ ・ ・ ・ ・	4 1
〃	永 井 香 織	・ ・ ・ ・ ・	4 1
〃	藤 本 利 昭	・ ・ ・ ・ ・	4 2
〃	師 橋 憲 貴	・ ・ ・ ・ ・	4 2
〃	湯 浅 昇	・ ・ ・ ・ ・	4 3
〃	渡 邊 康	・ ・ ・ ・ ・	4 3
准 教 授	久 保 隆太郎	・ ・ ・ ・ ・	4 4
〃	山 岸 輝 樹	・ ・ ・ ・ ・	4 4
専 任 講 師	鎌 田 貴 久	・ ・ ・ ・ ・	4 5
助 教	崔 烘 福	・ ・ ・ ・ ・	4 5
〃	福 村 任 生	・ ・ ・ ・ ・	4 6
〃	古 田 莉香子	・ ・ ・ ・ ・	4 6

資格	教授	氏名	岩田 伸一郎
<p>(タクシーと救命ドローンを活用したAED救命ネットワーク)</p> <p>タクシーと救命ドローンを使って要救助者の元にAEDを届ける搬送ネットワークを提案し、立地条件に応じて適材適所で2種類のモビリティを使い分ける運用方法による導入効果について検証を行っています。また、設置型AEDについては、上記の搬送ネットワークを補完する役割と位置づけ、アクセシビリティに基づく設置状況の評価や効果的な配置方法の検討を行っています。</p> <p>(「奥行き感」に注目した建築空間評価モデル)</p> <p>空間相互のつながりによって奥行き感を生み出す操作を空間デザインの本質と捉え、開口部の重なり合いが生み出す視線の連続性や光の伝搬をパターン化し、定量的に評価する手法を探求しています。都心部の狭小住宅や高い評価を得ている建築作品の分析により、立地特性、規模、用途に応じた優れた建築空間を誰もが計画できる手法への展開を目指しています。</p> <p>(誰もが安心して暮らせる住環境)</p> <p>高齢者や障害者などの移動弱者にとっても暮らしやすい住環境を目指し、車椅子による移動経路の評価に基づいた施設計画の手法や、高齢者の一次生活圏内の移動をサポートするモビリティサービスの可能性などについて探求しています。</p>			
1)井上了太, 岩田伸一郎, 木田琉誓, 千葉市におけるAEDタクシーの導入効果に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 第90巻 第833号, pp1663-1670, 2025年7月			
2)齊藤 未紗, 沖田 紅葉, 岩田 伸一郎, 光によるroomの接続関係に着目したルイス・カーンの空間構成の評価手法, 日本建築学会大会梗概, 建築計画分冊, 353-354, 2025年7月			
3)上田侖奈,長田岳大,大塚光喜,岩田伸一郎, 車椅子利用者の乗換え効率に基づくEVの増設効果の評価に関する研究 (山手線を対象として),日本建築学会大会梗概, 建築計画分冊, 395-396, 2025年7月			
キーワード	建築計画	建築デザイン	情報システム技術
SDGs17番号	③, ⑪		

資格	教授	氏名	亀井 靖子
<p>「近現代建築の維持保全」, 「和室の継承」, 「住宅地の維持保全」の研究を主に行っている。</p> <p>近現代建築の維持保全に関する研究では、DOCOMOMO Japan選定建築280件の変遷と課題を明らかにする論文を発表した。また、現在、選定建築の管理者・所有者に対して、建物の長寿命化や再生活用への意識や維持保全に関する課題についてのアンケート調査を行っている。</p> <p>和室の継承に関する研究では、若い世代が考える和室についての調査を行い、学生が考える和室像について明らかにした。継続して、次世代に継承されていく和室について、今までの和室の定義に縛られない新しい観点からの調査を試みている。</p> <p>住宅地の維持保全に関する研究では、佐倉市の協力を得ながら中古住宅リフォームの研究を継続して行っている。また、今後は、団地再生などについても共同研究を行っていく予定である。</p> <p>その他、日本建築学会建築教育委員会の委員として、専門家や建築学生を対象とした近現代建築の価値評価と保存活用に関する活動と、一般市民や子どもを対象とした近現代建築への関心を高める活動を行いながら、国内や海外の建築普及の成功事例の背景を研究分析し、現在の建築ブームについて理論化することを試みている。</p>			
1)亀井靖子, モダン・ムーブメント建築の継承と普及に関する研究(その1): DOCOMOMO Japan選定建築280の変遷と課題, 日本建築学会技術報告集, 第31巻, 第78号, pp1075-1080, (2025.6)			
2)櫻田祐理, 亀井靖子, 建築保存を目的としたクラウドファンディングに関する研究: 建築体験リターンからみるプロジェクトの傾向, 日本建築学会技術報告集, 第31巻, 第77号, pp568-572, (2025.2)			
3)亀井靖子, 学生の和室離れと和室文化の継承に関する研究-和室経験差と和室構成要素による和室像について-, 日本建築学会計画系論文集, 第89巻, 第824号, pp.1856-1861, (2024.10)			
キーワード	維持保全	近現代建築	和室 住宅地
SDGs17番号	④, ⑧, ⑪, ⑫, ⑰		

資格	教授	氏名	北野幸樹
<p>「高齢者の地域居住×地域居住者の余暇活動×居住地域・暮らしの愛着 ⇒地域主体の持続的まちづくり活動を育む」の観点から、「人と人」「人と活動」「人と空間」「活動と空間」の相互浸透性に視座を置き、時間の流れの中から生み出されるコミュニティデザイン、継承されてきた生活・空間の秩序と営まれてきた活動と調和する地域空間の持続性等について調査・研究を進めている。</p> <p>繁華街の持続性：日常生活と連関する繁華街の今日的意味、周辺コミュニティとの持続的関係に着目し、新宿ゴールデン街の時間の流れの中での変容と運営者・利用者の相互関係等に注目している。</p> <p>SAD（サスティナブル・エリア・デザイン）：時間の流れと共に変容する概念、社会環境の移り変わりや調和する暮らし続けることが出来る空間の創出や持続性の視座から、地域に持続・継承されてきた地域固有の活動・空間・時間を次世代に継承し、再生していくSADとして、特に鉄道沿線エリア・駅前エリアを対象として、地域で取り組まれているまちづくりと連関する様々な活動の実態について調査に取り組み、自治体・地域居住者と協働してワークショップ等を実施している。</p> <p>高齢者の暮らしの持続性：サービス付き高齢者向け住宅（サ高住）は単なる住まいではなく地域包括ケアを担う存在として捉え、まちづくり全体の中で位置づけられている。比較的自由度の高いサ高住のような高齢者の暮らしは、地域との関係づくりや開かれ方が重要であり、それらが調和する関係性の構築により、高齢者の暮らしの持続性、地域主体の持続的なまちづくりへと展開される。</p> <p>余暇活動と近隣空間の相補関係：集住環境（人が寄り集まって暮らす）特にテラスハウスを対象とし、集住意識と連関する異なる地域居住者の余暇活動実態に基づき、近隣空間で行われる余暇活動の時間的・空間的相補関係を明らかにすることを目的とし、余暇の視座から生活活動、居住・生活空間、集住意識、持続的まちづくり、地域への愛着等の創発関係に関する調査・研究を進めている。</p>			
<p>1) 石塚幸輝, 赤石健太, 大歳海斗, 北野幸樹 持続可能なまちづくりのための地域居住者の意識の変化と可視化 その1 意識の定量的分析による協働プロセスの構築 2025年度日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.1123~1124, 2025.9</p>			
<p>2) 小出千裕, 新尾一真, 馬場祐希, 北野幸樹 繁華街の機能・空間集積と持続的コミュニティに関する研究 その12 2025年度日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.485~486, 2025.9</p>			
<p>3) 瀬戸健似, 北野幸樹, 野田りさ テラスハウス居住者の改修実態と暮らしの意識の関係的側面からみたテラスハウスの暮らしの持続性 都市住宅学, 第123・124号, pp.106~113, 2025.6</p>			
キーワード	繁華街の持続性（新宿ゴールデン街） 持続的まちづくり・地域コミュニティ・SAD 高齢者の暮らしと周辺地域・福祉環境 居住者参加のまちづくり・空き家への意識		
SDGs17番号	③, ⑪		

資格	教授	氏名	篠崎健一
<p>人が住むことが如何に周囲のものごとと関係をつくり住む場所を定めるかについて、建築の視点から多様な方法で研究し、人が世界に自己の位置を見出し住むことの仕方を明らかにしようとしている。探究の根本には図式的認識が通底する。人間の生活や住むこと、場所は、風土の継承の上であり人はそれに敬意を払い丁寧に住むととらえ、物の背後にまもられる大切なものを如何に取りだすかを探究する。場所や人間生活にそなわる不純さや豊かさを捨象しない発見の可能性は、実在するフィールドにこそあると考え、フィールドへの参与を重視し、経験の蓄積を重視している。眼前のものごとをつぶさに観察し、言葉を尽くして記述し、解釈の足がかりを抽出する。ラオス北部山岳地帯の山岳少数民族のゲオ・パトゥという集落、沖縄本島北部の離島伊是名島の島尻郡伊是名村伊是名地区（集落）などの、いずれも日常生活の営まれる民家と集落を対象としてきている。民家や集落の空間構成の探究は、琉球の伝統的景観を構成する珊瑚石の石垣築造の探究につながる。民家の圍繞である石垣の、かたちの生成、石垣を築造する土着技術の獲得と継承という視点の研究活動から、社会的広がりや獲得しつつある。2025年3月には村立中学校の郷土学習において生徒たちに石垣築造体験を指導している。これらの活動を通じ2019年発行の「伊是名の石積みマニュアル（2019.10.空間図式研究会）」の改訂を試みており、直近には「琉球の石垣築造の教えと学びⅠ（石積みの基本）（2026.4.10.版空間図式研究会）」を制作している。</p>			
<p>1) 篠崎健一, 藤井晴行, 琉球民家の炊事屋改修に注目した雨端の空間変容について、日本建築学会大会2025（九州）梗概集, 講演番号5078, 2025巻pp.155-156, 2025年7月</p>			
<p>2) 篠崎健一, 藤井晴行, 佐藤幸峰, 高野真実：琉球民家の雨端空間の持続と変容について（沖縄伊是名集落に現存する伝統的琉球民家の空間変容の探究）、日本建築学会計画系論文集, 第90巻, 第832号, pp.1177-1188, 2025年6月</p>			
<p>3) 藤井晴行, 篠崎健一, 土着技術の継承の構成的方法論 琉球民家の石垣築造からの気づき、日本建築学会大会2024（関東）梗概集, 講演番号5524, 2024巻pp.1047-1048, 2024年7月</p>			
キーワード	風土	住むこと	定位 空間図式
SDGs17番号	③, ⑨, ⑪, ⑬		

資格	教授	氏名	下村修一
<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震時における杭の水平抵抗に関する研究 杭の耐震設計における杭の水平抵抗評価に用いる地盤のばね評価を既往の杭の水平載荷試験結果から検討している。</li> <li>・山留め壁の鉛直支持力に関する研究 ソイルセメント山留め壁の鉛直支持力評価方法について土槽実験で検討している。</li> <li>・拡底群杭の群杭効果の検討 土槽実験、画像解析およびFEM解析により、拡底杭の鉛直支持力における群杭効果評価法を検討している。</li> <li>・深層混合処理工法における改良土のばらつき低減に関する研究 セメント系地盤改良を対象に、セメントスラリーにファインバブルを混入し、改良体の強度のばらつきを低減する工法を検討している。</li> <li>・バイプロハンマ工法の支持層確認手法に関する研究 バイプロハンマ工法で打設する杭が設計で想定した支持層に到達したことを施工時に確認する手法について現場実測データを基に検討している。</li> </ul>			
1) 神原一翔, 下村修一, 熊田健太, 新井寿昭: 2本群杭の押込み載荷に伴う杭先端地盤挙動の画像解析による考察, 日本建築学会大会学術講演会, 2025年9月			
2) 丸山智之, 水谷羊介, 山口崇, 中村博, 下村修一, 松本真和: ファインバブル混入による地盤改良体の品質改善に関する研究-異なる粘性土における品質改善効果の差異について-, 第60回地盤工学研究発表会, 2025年7月			
3) 桐谷凌, 下村修一, 青山明憲, 野村悠斗: ソイルセメント山留め壁の鉛直支持力に及ぼす地盤による拘束の影響に関する模型実験, 日本建築学会構造系論文集, 90巻, 829号, pp.354-364, 2025年3月			
キーワード	杭 地盤改良 液状化 地盤調査		
SDGs17番号	⑪		

資格	教授	氏名	永井香織
<p>サーキュラー、サステナブルを実現するために行っている今年度の主な研究成果を以下に示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 施工環境の改善に関する取組 <ul style="list-style-type: none"> <li>・無振動、低騒音、低粉塵、無反力のレーザーを用いたレーザーケレンの共同特許, JR西日本の橋梁による実用化検証, プレス発表, 講演等を実施</li> <li>・建設現場における熱中症の実態調査, 施工における環境改善に関する研究</li> </ul> </li> <li>2) 木材の有効利用に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> <li>・経済産業省「令和7年度 国際ルール形成・市場創造型標準化推進事業（難燃薬剤処理木質材料に関する標準化調査）」の再委託を受け, アンケートや全国工場調査, 品質調査実験を行った。</li> </ul> </li> <li>3) サステナブルデザインに関する研究 <ul style="list-style-type: none"> <li>・各種遮熱断熱塗料および各種材料の品質評価実験</li> </ul> </li> <li>4) 歴史的建造物の維持保全に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> <li>・横浜市西谷浄水場の材料調査</li> <li>・軍艦島のコンクリート構造物の色彩調査</li> </ul> </li> <li>5) 超高層建築物の大規模修繕に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> <li>・基調講演 超高層住宅の維持保全について外壁から考える (第68回住総研シンポジウム)</li> <li>・超高層住宅の大規模修繕時の共用廊下の剥離に関する騒音振動測定, 外壁劣化調査</li> </ul> </li> </ol>			
1) 招待講演 Kaori Nagai, Lean Construction Practice in Japan, 33 <sup>rd</sup> Annual Conference of The International Group for Lean Construction (IGLC33), at Osaka Expo, 2025.6.2			
2) 黒澤陽介, 田中良, 杉江夏呼, 永井香織, 大正期に建設された横浜市西谷浄水場1号配水池の構造材料調査, 日本建築学会関東支部研究報告集95, pp221-224, 2025.3			
3) •Yasmine Elmenshawy, Mohamed Ahmed Refat El-Mahdy, Mohamed Moawad, Ahmed A. Elshami, Seleem S.E. Ahmad, Kaori Nagai, Investigating the bacterial sustainable self-healing capabilities of cracks in structural concrete at different temperatures, Case Studies in Construction Materials, Volume 20, July 2024, <a href="https://doi.org/10.1016/j.cscm.2024.e03188">https://doi.org/10.1016/j.cscm.2024.e03188</a>			
キーワード	サステナブル 施工環境改善 維持保全 劣化メカニズム		
SDGs17番号	⑨, ⑪, ⑫, ⑬, ⑰		

資格	教授	氏名	藤本利昭	
<p>建築物の構造安全性および耐震安全性を中心に研究を行っている。</p> <p>特に近年では、コンクリート充填鋼管構造（以下、CFT構造）、鉄骨コンクリート構造（CES構造）といった合成構造の研究開発に取り組む他、歴史的建造物、近代建築の構造性能評価、更には鋼構造の新たな合理化工法の安全性に関する研究も行っている。</p> <p>CFT構造の研究は、CFT構造の構造設計を行う際の指針となる日本建築学会「コンクリート充填鋼管構造設計規準」の策定のため、研究を継続的に進めている。本研究の成果は、上記設計規準に盛り込まれており、研究はまとめの段階にきている。</p> <p>更に歴史的建造物、近代建築の構造性能評価に関する研究に関しては、これまで大正時代末期から昭和初期にかけて設計・建設された海軍建築を中心に、文献調査や現地調査、構造実験を行っている。特にここ数年は本学部の図書館を代表とする近代建築の構造設計・構造性能に関する研究として、振動性能の把握に関する研究もスタートしている。</p> <p>また、仮設材を対象とした新しい工法の検討も継続的に行っており、かなりデータが蓄積されてきており、さらに発展させた鋼構造の合理化構法としての研究にも着手している。</p>				
1) 田中遥菜, 藤本利昭, 田口孝, チェ ホンボク, 高炉セメントB種を用いた繊維補強コンクリートの材料特性に関する研究, 第16回複合・合成構造の活用に関するシンポジウム, (DVD), 2025年11月				
2) 藤本利昭, コンクリート充填鋼管柱の構造性能に関する調査研究 その2:設計指針との比較, 日本建築学会技術報告集, 第31巻・第78号, pp.782-787, 2025年6月				
3) 坪井理恵子, 藤本利昭, 水野僚子, 山中美穂, 旧海軍施設を中心とした近代建築における使用鋼材に関する研究, 日本鋼構造協会鋼構造年次論文報告集, 第32巻, (DVD), 2024年11月				
キーワード	建築構造	合成構造	構造性能	耐震性能
SDGs17番号	⑨, ⑪, ⑫			

資格	教授	氏名	師橋憲貴	
<p>林野庁の令和6年度 森林・林業白書によると、令和5年度のわが国の木材需要量および国産材供給量は前年の令和4年度より減少し、木材自給率が42.9%と低いことを示している。国産木材を利用することは森林が吸収した炭素を長期的に貯蔵することができ、供用期間後はカーボンニュートラルな燃料として化石燃料の代替としての利用も可能である。このことは2050年までのカーボンニュートラルの実現に木材の利用が貢献できるとして、脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律に規定されている。一方、階層別・構造別の着工建築物の床面積の比較では、3階建て以下の低層の住宅建築は木造率が82.6%であるが、非住宅建築は木造率が14.7%であり、低層の非住宅建築とともに4～5階建ての中層の非木造建築物の木造化が木材需要の創出にとって重要である。そこで本研究では、鉄筋コンクリートと木材を一体化した新たな構造システムとして、鉄筋コンクリートと直交集成板および木ダボ接合積層材を組み合わせた合成床について実験的研究を行った。その際、わが国の木材資源の動向の調査という基本的な事項から鉄筋コンクリートと直交集成板および木ダボ接合積層材の一体化の方法、合成床と架構との接合部の構造性能さらに合成床の長期的性能まで幅広く研究することを目的として、合成床を非住宅建築の中層木造建築物へ適用することを目指した研究を行った。</p>				
1) 師橋憲貴：コンクリートと直交集成板のエポキシ樹脂接着剤による一体化 ―その3 木ダボ接合積層材を用いた合成床―, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (九州), pp.777-778, 2025.7				
2) 師橋憲貴：コンクリートと直交集成板のエポキシ樹脂接着剤による一体化 ―その2 合成床の曲げ性能―, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東), pp.633-634, 2024.7				
3) 熊谷光記, 水口和彦, 師橋憲貴, 阿部 忠：鋼板格子筋を用いて配置法の異なるPCM増厚補強を施した下水用マンホールの補強効果に関する実験研究, コンクリート工学年次論文集, Vol.46, No.2, pp.217-222, 2024.7				
キーワード	合成床	エポキシ樹脂接着剤	直交集成板	木ダボ接合積層材
SDGs17番号	⑨			

資格	教授	氏名	湯 浅 昇	
1. 夏季におけるコンクリートの品質に関する研究 2. 冬季におけるコンクリートの品質に関する研究 3. 混和剤、養生剤によるスラブコンクリートの品質改善に関する研究 4. 鉄筋腐食とコンクリートの含水率に関する研究 5. 仕上材による鉄筋コンクリート構造物の保護効果に関する研究 6. 局所のコンクリート凍害環境を評価する方法の提案と検証 7. 日本における凍害の南限に関する研究 8. 一般環境・塩害環境・凍害・火山性ガス環境におけるコンクリートの暴露試験 9. 構造体コンクリートの含水率測定技術の確立 10. 構造体コンクリートの表面強度推定技術の確立 11. 石材の火害、藻類付着に関する研究（国際共同研究） 12. ケイ酸塩系塗布剤を用いたひび割れ閉塞に関する研究 13. 防水層のふくれメカニズムに関する研究 14. 鉄筋コンクリート構造物の解体工法に関する研究。				
1)湯浅昇：なぜコンクリートは非破壊試験を難しくするのか？表面アプローチ非破壊試験の限界と非破壊試験（微破壊）の意義，日本非破壊検査協会，非破壊検査，Vol.75, No.3, pp.72-76, 2026.3				
2)湯浅昇・小山智幸：局所のコンクリート凍害環境を評価する方法の提案と検証実験，日本建築学会九州支部研究報告，第65号，pp.133-136, 2026.3				
3)Rikiya Takahashi, Noboru Yuasa：EFFECTIVE DEPTH FOR CONCRETE OF MEASURED VALUE OF PUSH TYPE HIGH-FREQUENCY CAPACITANCE MOISTURE METER, 2025 China-Japan-Korea Symposium on Waterproofing Technology, pp.117-122, 2025.10				
キーワード	コンクリート 耐久性 非破壊試験 解体			
SDGs17番号	⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮, ⑰			

資格	教授	氏名	渡 邊 康	
・集合住宅設計・住宅設計 住空間における，建築要素と人の関係，家事動線，歴史についての研究 また，住空間における熱損失係数=Q値を下げ，1～2階を一体空間とした住宅を計画し，竣工後に室内の温熱環境を測定し，外部環境からの影響や，エネルギー消費量を調べている。 ・リノベーション・コンバージョンにおける集落再生及び新旧のデザイン手法 イタリアの過疎化した集落において，空家を宿泊施設に改修して集落と村民の生活を存続させようという“Albergo Diffuso”という取り組みがあり，その運営や配置計画などの事例を調べる。 それとともに，リノベーション・コンバージョンにおいて古いものをどのように残し，新しいものをどのように付加させるかのデザイン手法としても新旧の関係を研究する。				
1)菊地真菜・渡辺康，住空間リノベーションにおける設計者の思考と手法 -長坂常，増田信吾らの事例から-，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp275-276, 2025年9月				
キーワード	住宅設計 室内温熱環境 集落の再生 アルベルゴディフーズ			
SDGs17番号	⑧・⑪・⑫			

資格	准教授	氏名	久保 隆太郎		
<p>本研究は、建築設備および環境工学の観点から、建築空間における温熱・空気環境の最適化と、その評価・制御手法の高度化を目的としている。主な研究テーマは、①ヒートアイランド現象の実測データと衛星データを統合した都市環境評価、②空調・通風・日射遮蔽を統合した建物の省エネルギー制御、③室内環境の健康性・快適性評価指標の構築である。</p> <p>具体的には、熊谷市を対象に多数の温湿度センサーによる実測データを収集し、NDVI等のリモートセンシング指標と組み合わせて、気温分布と緑被率・人工被覆率との関係を定量的に分析している。また、CFD解析を用いて建物周辺および室内の気流・温度分布を再現し、通風や日射遮蔽の効果を可視化・評価している。</p> <p>さらに、外気条件に応じて通風と日射遮蔽を切り替える制御手法の開発と実証を行い、エネルギー消費削減効果を統計的に検証している。加えて、LCEMツールを用いて建物のライフサイクル全体におけるエネルギー管理の高度化を図るとともに、CASBEEを発展させた宿泊施設のウェルネス評価手法の構築にも取り組んでいる。これらを通じて、建築環境の質の向上と持続可能な社会の実現に寄与することを目指している。</p>					
1) WANG Zhenyu / 森上 雄介 / 久保 隆太郎：熊谷市を対象とした温熱環境に関する研究 その2 百葉箱に設置した温湿度計による温熱環境の長期定点観測, 日本建築学会学術講演梗概集, 環境工学 I, pp.1983-1984, 2025-07					
2) 久保 隆太郎 / 近藤 武士 / 大平 達也 / 秋元 孝之 / 横山 計三 / 長井 達夫 / 高野 倅希 / 宮田 征門：非住宅建築物の省エネルギー基準における標準室使用条件の検証 (第9報) 病院等病室の照明・機器消費電力, 在室人数の実態調査, 日本建築学会学術講演梗概集, 環境工学 I, pp.2443-2444, 2025-07					
3) 近藤 武士 / 佐藤 誠 / 西村 佳祐 / 秋元 孝之 / 横山 計三 / 長井 達夫 / 久保 隆太郎 / 宮田 征門：非住宅建築物の省エネルギー基準における標準室使用条件の検証 (第5報) 小学校普通教室の照明・機器消費電力の実態調査, 日本建築学会学術講演梗概集, 環境工学 I, pp.2235-2236, 2024-07					
キーワード	エネルギーマネジメント ヒートアイランド評価 CFD CASBEE				
SDGs17番号	③, ⑦, ⑧, ⑪, ⑬				

資格	准教授	氏名	山岸 輝樹		
<p>1) 都心回帰と高密度化が進む都市居住地を対象に、集合住宅団地における外部空間の構成と利用実態を分析している。従来、外部空間計画は郊外住宅地を前提に発展してきたが、本研究では都市的文脈に着目し、「街路性を重視する構成」と「囲み性を重視する構成」という二つの計画類型を抽出している。さらに、滞留行動の分析を通じて、空間構成の違いが滞在の仕方や活動の多様性に差異を生み出すことを示し、建物足元の空間を都市生活を支える公共空間として再評価している。</p> <p>2) 福祉施設を対象に、地域社会との関係性に着目した建築計画の可能性を検討している。助成事業の先進事例を取り上げ、ヒアリング、空間構成の比較分析、利用実態調査を通じて、施設を地域に開くための意図と手法を明らかにしている。特に、交流を前提とした空間構成や運営の工夫が地域利用を誘発していることを示し、福祉施設が共生拠点として機能するための計画条件を提示している。</p> <p>3) 駅前に立地する図書館を対象に、地域拠点としての公共施設のあり方を検討している。利用者の滞在行動を時間変化、空間内移動、読書時の姿勢から分析し、施設ごとの利用特性の違いを明らかにしている。その結果、空間の開放性や多様な居場所が滞在時間や行動の自由度、「居場所」としての質に影響を与えることを示し、図書館が閲覧施設から地域に開かれた滞在型空間へと変容している実態を捉えている。</p>					
1) 齊藤 光, 山岸 輝樹, 東京都心に建つ集合住宅団地の外部空間利用に関する研究, 日本建築学会大会 学術講演会, p.83-84, 2025					
2) 高橋 諒, 菅澤 梨乃, 山岸 輝樹, 「深川えんみち」における地域交流の実態 「みらいの福祉施設プロジェクト」を事例とした、地域に開かれた福祉施設に関する研究, 日本建築学会大会 学術講演会, p.1185-1186, 2025					
宮 叶夢, 守屋 陽平, 山岸 輝樹, 駅前地域の拠点化を意図した図書館における過ごし方に関する研究 太田市美術館・図書館と那須塩原図書館みるの比較を通して, 日本建築学会大会 学術講演会, p.613-614, 2025-07					
キーワード	各種建物・地域施設 計画論 都市・地域計画 集合住宅				
SDGs17番号	⑪, ⑬				

資格	専任講師	氏名	鎌田 貴久
<p>・構造用木質面材のせん断性能に関する研究  木質面材のせん断性能は、昨年の許容応力度設計方法に示された。釘接合部のせん断性能からの耐力壁性能推定などに使用するために必要な実験である。一方で、構造用木質面材の試験方法としてASTM D 1037に示されたTwo Rail Shear Method があるが、国内で実施可能な施設が乏しい。また、試験方法として、試験体に利用できるレール材に関して明確な規定がない。そこで、国内に流通している木質面材のせん断弾性係数 (G) および せん断強度 (<math>\tau</math>) の算出をおこない、レール材の要求性能に関する検証を行った。また、現在、せん断強度 (<math>\tau</math>) の簡易的な推定方法の検討を実施中である。</p> <p>・木質構造物の耐力壁性能に関する研究  木造住宅をはじめとする木質構造物ではその耐震性能を耐力壁が担う。また、使用される面材は多様化している。木造住宅において従来は、5倍までの壁倍率での使用であったが、耐震基準の見直しにより住宅に要求される性能は増している。そこで、本研究ではあらためて、軸材料と面材料の組み合わせによる性能の違いについて確認をおこなった。</p>			
1) 鎌田貴久, Two-Rail Shear法による構造用面材のせん断強度評価に向けたレール材の影響に関する検討, 日本木材学会大会 (広島), [H17-P1-08], 2026年3月			
2) 鎌田貴久, 中村 亮太, 大橋好光 厚板を用いた Two-Rail Shear 試験に関する研究, 日本建築学会大会 (九州) 2025年 9月			
3) 鎌田 貴久, 藤村 晃 面内せん断試験におけるレール材の影響に関して 日本木材学会大会 (仙台大会) 2025/3/19			
キーワード	構造用木質面材	せん断弾性係数	せん断強度
SDGs17番号	⑪, ⑮		

資格	助教	氏名	崔 烘 福
<p>カーボンニュートラル社会の実現に向けて、建築物の長寿命化を図ることは重要であり、また、新しいセメント・コンクリートの開発も進められているが、それらの多くは鉄筋の腐食に対する懸念を抱えているとされており、建築物の耐久性確保技術の開発が強く求められている。本事業 (国土交通省 建築基準整備促進事業) は、溶融亜鉛めっき鉄筋を使用した鉄筋コンクリート造建築物等の長寿命化に資する基準整備のための基礎的検討を行うものである。</p> <p>令和7年度の研究活動として、耐久性や防錆性能等に関する検討では、曲げ加工部の母材保護効果を検討するための試験体を製作し促進試験を行った。また、品確法緩和のために防食性能の検討を行う試験体の暴露試験を継続し、腐食性状を評価した。さらに、暴露環境における防食および付着性能の検討を行い試験体の暴露試験を継続し腐食性状を評価した。構造性能に関する検討では、柱部材の正負繰り返し載荷実験を行い、構造性能の確認を行った。また、柱梁接合部試験体を製作し、載荷実験を実施することにより構造性能を評価した。さらに、重ね継手梁試験体を製作し、載荷実験を行い重ね継手に関する性能分析を行った。耐火性能に関する検討では、溶融亜鉛めっき鉄筋の加熱後の付着性能を検討するために実施した。これらの実験結果に基づき、溶融亜鉛めっき鉄筋の性能判定に関する基準案を検討している。</p>			
1) 山口慧, 向井智久, 崔烘福, 衣笠秀行, 高炉セメントC種に相当するコンクリートを用いたRC梁試験体の構造性能, コンクリート工学年次論文集, Vol.47, No.2, pp.464-468, 2025.07			
2) 高野慶貴, 向井智久, 崔烘福, 有木克良, 異なる節形状を有する接着系あと施工アンカーの付着性能評価, コンクリート工学年次論文集, Vol.46, No.2, pp.751-756, 2024.06			
3) H. Choe, T. Mukai, H. Kinugasa, An Experimental Study on Failure Behavior of RC Beam Using Hot-dip Galvanized Steel Rebar, 18th World Conference on Earthquake Engineering (WCEE), 12p., 2024.06			
キーワード	溶融亜鉛めっき鉄筋	接着系あと施工アンカー	付着性能 構造性能
SDGs17番号	⑪		

資格	助教	氏名	福村 任生		
<p>1) 長野県伊那地方における文化的景観の総合的研究 長野県伊那地方における歴史的景観を文化的景観として評価し、都市および農村の持続再生を目指す研究。現在の取り組みは、a) 飯田市遠山地方の和田の町並み調査と下栗・八重河内・山原の斜面集落調査、b) 阿智村清内路・駒場の町並み調査を実施している。</p> <p>2) 歴史的景観の実証的復原方法に関する研究 日本の景観構造の歴史的変容過程については、従来では中近世の絵図を用いた研究があったが、これらは非定量的な分析にもとづき、全体的傾向を論じたものに過ぎない。GIS等のデジタル空間分析ツールを用いた、旧土地台帳や旧地籍図を用いた実証的景観研究の方法については、基本的な史料評価を含めて十分な検討がなされていない。本研究では、明治20年代の伊那地方における旧地籍図の空間史料としての評価ならびにそれに基づく歴史GISによる景観復原の方法を研究している。</p> <p>3) 20世紀イタリアにおける歴史的環境の再評価とその理論形成に関する研究 1970年代からイタリアでは旧市街や伝統的農業景観の保全に向けた都市計画の理論と実践の面で国際社会をリードし、日本における都市研究にも深く影響を与えている。しかし、そうしたイタリア都市計画の理論は1960年代以前の建築理論から発展したものであり、根幹にある思想背景は明らかにされていない。建築家サヴェリオ・ムラトリー(1910-1973)を中心に研究を進めている。</p>					
1) 福村任生, 山里における街道宿の形成—阿智村駒場を事例として—, 都市史研究, 12巻, pp.75-83, 2025.10					
2) 福村任生, 明治期建物台帳を利用した歴史的都市景観の変容過程の分析 —長野県旧飯田町を事例として—, 日本建築学会技術報告集, 31巻, 79号, pp.1654-1659, 2025.10					
3) 福村任生, 明治期地籍図の再評価とGISを用いた歴史的景観研究, 歴史学研究, 1050号, pp.14-24, 2024.7					
キーワード	文化的景観 歴史的町並み 都市再生 歴史GIS				
SDGs17番号	④, ⑧, ⑪, ⑫, ⑮				

資格	助教	氏名	古田 莉香子		
<p>1. 東南アジアにおけるインフォーマル居住地の住居環境に関する研究 インドネシアやタイのインフォーマル居住地である、低所得者層が多く居住するエリアを対象に、持続可能な住まいのあり方や居住環境の改善のための手法およびエリア全体のコミュニティの実態について調査している。また、東南アジアでは様々な自然災害が発生しており、インフォーマル居住地においても被害を受けている実態がある。そうした中での地域コミュニティのあり方や災害への対策、または被災後の復興まちづくりについての調査・研究を行っている。</p> <p>2. 消防団活動からみる地域防災計画のためのエリアマネジメントの方法論に関する研究 近年、多様化かつ大規模化する災害に対して、各地域では様々な防災対策が行われている。その中で、地域防災の要として存在する消防団に着目し、消防団と地域コミュニティの活動実態や防災拠点となる地域施設の整備実態の調査を行い、地域防災計画のためのエリアマネジメントの方法論について研究を進めている。</p>					
1) 田中麻里, 古田莉香子, 石田 寿信, タイ・チェンマイにおけるコアハウジング住宅地とその変容, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (九州), pp. 151-152, 2025.9					
2) 酒井大誠, 古田莉香子, 広田直行, 地域コミュニティを形成する住民の防災活動の要素についての研究—千葉県習志野市の自主防災組織を対象として—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (九州), pp. 991-992, 2025.9					
3) Rikako Furuta, A Study on the Development of Kampung Improvement Program in Surabaya, Indonesia, The 14th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, 2024.9					
キーワード	インフォーマル居住地 居住環境整備 地域コミュニティ 地域防災				
SDGs17番号	①, ③, ⑪				